

2 研究の実際

(1) 家庭科の授業で育みたい力

ア 家庭科で解決したい生活課題

高等学校家庭科では「主体的に生活を創造する能力と実践的な態度」を育成することを目標としていますが、中間は、『創造する能力』は、問題解決能力に通ずるものである。したがって、『生活を創造する能力』とは、『生活課題を解決する能力』ともいえる⁽¹⁾と述べています。そこで、学習指導要領及び「家庭基礎」の教科書を基に、家庭科で解決したい生活課題についてまとめました(表1)。

表1 想定される生活課題の例と課題を解決したときの生徒の姿

領域(家庭基礎)	生活課題	課題を解決した生徒の姿
人の一生と家族・家庭及び福祉	青年期の自立と家族・家庭	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の人生設計や目標をもっている。 ○家族や友人とうまくコミュニケーションがとれている。 ○将来どのような仕事に就き、どのような働き方をするか考えている。 ○家族をつくることや家族の役割について考えることがある。 ○家族に関する法律に興味がある。 ○各ライフステージの特徴や課題が分かる。 ○生活時間を有効に使っている。
	子供の発達と保育	<ul style="list-style-type: none"> ○乳幼児の世話ができる。 ○乳幼児の身体的・精神的特徴が分かる。 ○乳幼児期には、発達に応じた親の働き掛けが重要であることが分かる。 ○子供を取り巻く環境の変化と、子供に与える影響等について理解している。
	高齢期の生活	<ul style="list-style-type: none"> ○高齢者の心身の変化の特徴が分かる。 ○高齢者の食事、着脱衣、移動などの介助ができる。 ○自分が高齢期になったときのことを考えたことがある。 ○高齢社会の現状と課題を理解している。
	共生社会と福祉	<ul style="list-style-type: none"> ○社会福祉、社会保障の仕組みについて理解している。 ○自分が住んでいる地域の行事等を知っている。 ○自分が住んでいる地域の公共施設等が分かる。 ○自分が住んでいる地域の行事に参加したことがある。 ○ボランティア活動をしたことがある。
生活の自立及び消費と環境	食事と健康	<ul style="list-style-type: none"> ○栄養のバランスを考えて食べている。 ○食に関する問題について知り、より良い食生活の実践に取り組んでいる。 ○食品の選び方や保存の方法、食中毒や食品添加物に関する知識をもっている。 ○調理の基礎・基本が身に付いている。 ○地域の食文化に興味がある。

生活の自立及び消費と環境	被服管理と着装	<ul style="list-style-type: none"> 健康で快適な被服の選択と着装 衣生活の管理 資源の有効活用 	<ul style="list-style-type: none"> 被服の働きと役割を理解している。 TPOを考えた着装ができる。 表示、素材、サイズ、品質を確認して被服を選択し、適切な取り扱いができる。 被服と資源や環境問題との関係に興味がある。
	住居と住環境	<ul style="list-style-type: none"> ライフステージに応じた住居の条件 安全で健康かつ快適な住居 環境に配慮した住居 	<ul style="list-style-type: none"> 住居の役割やライフステージに応じた住要求の変化について理解している。 安全で快適な住まいの条件が分かる。 地球環境と住まいの関係性に興味をもち、持続可能な住居や都市について考えたことがある。
	消費生活と生涯を見通した経済の計画	<ul style="list-style-type: none"> 消費者問題の背景と消費者の権利 経済計画とリスク管理 	<ul style="list-style-type: none"> 現代の消費生活の特徴を理解し、責任ある消費行動ができる。 経済的自立を目指し、ライフステージ全体を見通した経済計画ができる。
	ライフスタイルと環境	<ul style="list-style-type: none"> 消費生活と環境の関わり 持続可能な社会を目指した生活の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な生活が環境に与える影響を考え、持続可能な社会を目指したライフスタイルを身に付けようとしている。
	生涯の生活設計		<ul style="list-style-type: none"> 生活設計の考え方や職業設計の重要性を理解し、自分の生涯の生活設計に生かそうとしている。
ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動			<ul style="list-style-type: none"> 家庭や学校、地域の問題点を見だし、改善向上を目指して活動している。

生活課題の例を見てみると、個人で解決する課題、家族や地域社会で解決する課題、社会システムや環境面で解決する課題等、様々なレベルの課題があることが分かります。解決すべき生活課題のレベルを、アメリカの家政学者であるブラウン（Brown, M, M）が示した生活行為に当てはめてみると、表2のように整理することができます。また、荒井は青年期の発達課題を「自立性」「他者との関係性」「市民性」「自尊・自己理解」の4つに分類しており、家庭科の学習課題と深い関係があることを述べています。4つの発達課題のうち「自尊・自己理解」は、個人の内面に関わる青年期の課題であり、各課題を達成する上で、重要な精神的基盤となるものと捉えられています。荒井がまとめている家庭科の学習課題は、表2のレベル1からレベル3までの生活課題と共通しており、生活課題を解決していくことで青年期の発達課題が達成されていくと言うこともできます。そして、それぞれのレベルの生活課題は、青年期の各発達課題と相互に関連していることから、家庭科で解決したい生活課題は、それぞれのレベルの課題を個別に解決するのではなく、相互に関連させて総合的に解決していくことが大切です。

表2 解決すべき生活課題のレベル

レベル	行為の種類	行為が目指すもの
1 個人の生活課題	技術的行為 (物との関わり)	○衣食住を中心とした日常生活を自立して営むことを目指す。
2 家族や地域社会の人々の生活課題	コミュニケーション的行為 (人との関わり)	○生活において、男女間、世代間の協働を通して、互いに理解し合い合意を形成することを目指す。 ○乳幼児、高齢者、障害者などをサポートし、彼らのウェルビーイングを保障するための手助けをすることを目指す。
3 社会システムにおける生活課題	解放的行為 (物と人との複雑な関わり)	○ジェンダーや環境問題、消費者問題など、これまでの行為を批判的に捉えて吟味し直し、古い価値観を打破するとともに新しい価値観に従って行為を決定することを目指す。

図1は、生活課題のレベルと青年期の発達課題との関係を示したものです。三つ葉の葉一つ一つは生活課題のレベルと青年期の発達課題を表しています。三つ葉の茎は青年期の発達課題である「エ 自尊・自己理解」

を表しています。高等学校の家庭科の学習では、レベル1の生活課題を解決することで「自立性」が主に育まれたり、レベル2の生活課題を解決することで「他者との関係性」が主に育まれたりしながら最終的には、「自尊・自己理解」という基盤を大きくしながら、3つの発達課題をバランスよく育んでいく必要があると考えます。

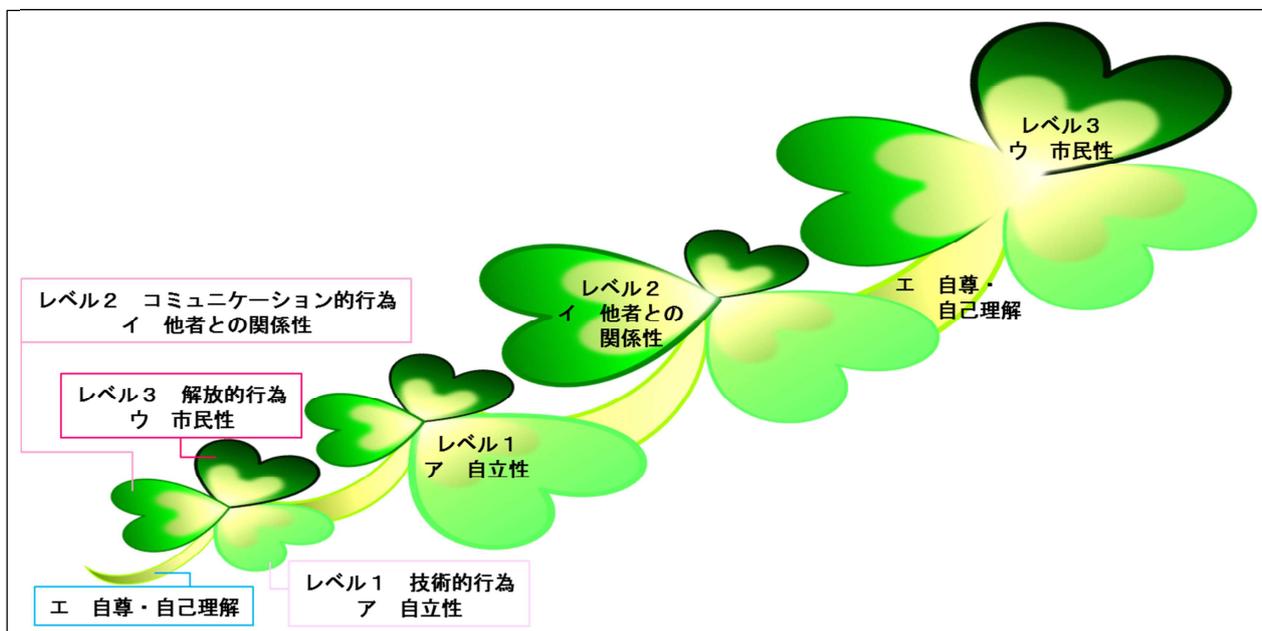


図1 生活課題のレベルと青年期の発達課題との関係

イ 家庭科の学習方法

学習指導要領において、小・中・高等学校の家庭科の目標と内容の取り扱いを見てみると、小・中・高等学校を通して、実践的・体験的な活動と問題解決的な学習を充実することが述べられています（表3）。

表3 学習指導要領における内容の取り扱い

校種	内容の取り扱い
小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○学習したことを基に家庭生活に生かし、継続的に実践できるようにするために、家庭との連携を積極的に図る。 ○実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、言語活動の充実を図りながら学習指導を進めていくことによって、生活をより良くしようとする実践的な態度を育むこと。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識及び技術を習得し、基本的な概念などの理解を深めるとともに、仕事の楽しさや完成の喜びを体得させるよう、実践的・体験的な学習活動を充実する。 ○生徒が学習した知識及び技術を生活に活用できるよう、問題解決的な学習を充実するとともに、家庭や地域社会との連携を図るようにすること。
高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○原則として10分の5以上を実験・実習に配当する。 ○生徒が自分の生活に結び付けて学習できるよう、問題解決的な学習を充実すること。 ○子供や高齢者など様々な人々と触れ合い、他者と関わる力を高める活動、衣食住などの生活における様々な事象を言葉や概念などを用いて考察する活動、判断が必要な場面を設けて理由や根拠を論述したり適切な解決方法を探究したりする活動などを充実すること。

特に、高等学校家庭科では、生徒の思考力・判断力・表現力を育む観点から、適切な課題解決方法を探究する活動や、他者と意見を共有し、互いの考えを深めることを通して協同的な関係を築くような活動、衣食住などの生活における様々な事象やものづくりなどに関する実践的・体験的な活動を一層重視し、その過程で実感を伴って理解させるような活動が重視されています。アで示したように、生活課題を解決する能力を育む観点

からも、問題解決的な学習を充実する必要があります。武藤は、「問題解決学習を実践する際、最も問題になることは生徒が課題を発見できないことである」⁽²⁾と述べています。豊かさの中で育ち、生活体験が不足している生徒は、生活の課題に気付く力が弱く、自ら生活の課題を見いだすことが困難な状況です。家庭科における問題解決能力の育成には、まず生徒に生活の現状を見つめさせ、生活に関する課題意識を喚起することが大切であり、問題解決的な学習の更なる工夫が必要とされています。

中間は、「家庭科における問題解決的な学習は、思考による問題解決過程だけでなく、行動による問題解決過程も含むもの」⁽³⁾としています。そして、問題解決的な学習の具体的な学習方法として、行動を通して学び、行動変容をねらう主体的学習方法としての「アクション志向学習」と「参加型学習」が効果的であるとしています。また、表4のようなグループなど共同で取り組む学習を特に「参加型アクション志向学習」と称し重視しています。家庭科における効果的な学習として取り入れていくべき方法であるといえます。

表4 「参加型アクション志向学習」の様々な手法

学習方法	内容
ブレイン・ストーミング	集団でアイデアを出し合うことによって相互の連鎖反応や発想の誘発を期待する方法
インタビュー	対象者に直接話を聞くことにより人々の意見や生活実態を把握する方法
アンケート	アンケートを作成し、周りの人の意識や態度を分析したり、意見を把握したりする方法
フィールドワーク	設定した課題に即した場所を訪れ、現地で検索、採集、取材などをして具体的な情報を得る方法
KJ法	カードにアイデアを書き出し、整理することで問題点を明らかにしたり、理解を深めたりする方法
イメージ・マップ	自分の頭の中にあるイメージを絵や図にする方法
ランキング	あるテーマについて、用意された複数の選択肢を、良いと思うものから順に並べる方法
フォトランゲージ	写真や絵を使って、そこから受けたメッセージを互いに話し合う学習方法
新聞分析	時事ニュース記事を分析することで、生活問題を把握し、解決法を考える方法
ロールプレイング	役割を演じることによって学ぶ方法
シミュレーション	ある事象をモデル化、単純化して、それを疑似的に体験する方法
ディスカッション	ある論点について議論をし、合意形成や結論を導き出す方法
ディベート	ある特定のテーマについて、「賛成派」と「反対派」の2つのチームに分かれ討論する方法
ジグソー学習	ひとつの主課題を解決するために課題を分担し、同じ課題をもつ者同士がグループを作り学習を終えた後、元のグループに戻ってその成果を伝え合うことで課題全体を解決するという学習形態
ゲーム	遊びの要素を用いた学習方法であり、授業に用いられるゲームには、言語パズル、カードゲーム、アクションゲーム等がある
バズ・セッション	「バズ」はがやがや話すという意味。少人数のグループに分かれて話し合った結果を持ち寄って、全員で討議する方法。
アサーティブ・トレーニング	他者とのコミュニケーション場面において、葛藤や対立が生じた場合、「非攻撃的自己主張」ができるようなコミュニケーションスキルをトレーニングする方法

中間美砂子編「家庭科への参加型アクション志向学習の導入【22の実践を通して】」を参考にまとめたもの

ウ 家庭科とアクティブ・ラーニング

OECDのキー・コンピテンシーや持続可能な開発のための教育(ESD)等との関係から、文部科学省は、次期学習指導要領改訂に向けて、「アクティブ・ラーニング」を推進していく姿勢を示しています。問題発見・解決や協働的問題解決のために必要な思考力・判断力・表現力を育む観点から「アクティブ・ラーニング」が

注目されています。

文部科学省では、アクティブ・ラーニングについて、次のように定義しています。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。⁽⁴⁾

家庭科は、先に述べたように、これまでも実践的・体験的学習や問題解決的な学習を行ってきており、特に高等学校では、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動において、問題解決学習や体験・調査学習を重視してきました。そして、イの学習方法で示した「参加型アクション志向学習」はアクティブ・ラーニングの手法そのものです。

家庭科は、生活を営む実践力とより良い生活を創造する主体としての能力を育む教科です。実践力を身に付け、より良い生活を創っていくためには、個人や家族を取り巻く生活課題をどのように解決するのか意思決定をし、身に付けた知識や技術を応用しながら解決していく必要があります。生活課題に関しては先に取り上げたように様々であり、個人や家族、地域・社会によって異なります。また、家庭科で解決すべき生活課題には必ずしも正解があるものばかりとは限りません。そして、必ずしも体験ができるものばかりでもありません。多種多様な生活課題に対応していくためには、多様な価値観を受け入れ、判断していくことが大切です。多様な価値観を知り、受け入れるためには他者との協働が不可欠です。他者と協働することは、今まで知らなかったことに気付くなど、体験に代わる効果も期待できます。このようなことから、家庭科において、アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れることは非常に重要であり、これまで行ってきた学習方法に、アクティブ・ラーニングの視点を加えて一層充実させていく必要があると考えます。

《引用文献》

- (1) 中間 美砂子編著 『家庭科教育法—中・高等学校の授業づくり—』 2004年 建帛社 p. 5
- (2) 武藤 八重子 『新教育課程に向けて授業へつなぐ』 2002年 教育図書 p. 47
- (3) 中間 美砂子編著 『家庭科への参加型アクション志向学習の導入』 2006年 大修館書店 p. 13
- (4) 文部科学省 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集』 平成24年 p. 37